三人の告白

羽衣

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
三人の告白

【Ｎコード】
Ｎ３５１６Ｔ

【作者名】
羽衣

【あらすじ】
私、彼女、彼がそれぞれ自分の心中を告白していく。
それにより見えてくる三人の関係。

嘘吐きの恋

神様、私は嘘吐きです。

今日も嘘をついてしまいました。
こんなんじゃいけないって解ってます。
でも、嘘をつかなきゃいけないんです。

たまたま同じ親から産まれて、たまたま同じ誕生日で、
たまたま双子っていうカテゴリーに分けられても性格は同じようにはならない。
私たちほど姿は同じでも性格が全く似てない双子はいないと思う。
私たちが向かいあうとまるで鏡を見ているかのよう。けれど、性格は違う。

なんで神様は私たちを双子にしたんだろう。

私はいつも気が付きたくない事実に気付いてしまう。
貴方の瞳が私の片割れを追っていることに…
けして、私には向けられることのない瞳…
いつも笑顔を向けてくれるけど私を通して貴方は彼女を見ている…。
どうして私ではないの？どうして？
口に出すことも許されない気持

貴方は今日も彼女だけを見つめている。

ときたま、馬鹿らしくなる。

報われないことが解っているのになぜ私は貴方を見つめているのだろうと。
けれど、私は今日も貴方を見つめる。
貴方の視線にはけして写らないと解っているのに。

実のらないって解っているのにいつも期待をしてしまう。
そして期待は裏切られる。
貴方は私から彼女を見る。
いつもそう、私には気が付いてくれない。

貴方が気にするのは、彼女だけ。

だから、私は蓋をした。
貴方が気が付かないように自分の心に蓋をした。
厳重に奥深くにしまってしまった。
貴方が彼女だけを見ていることを忘れるために。

そして今日も私は嘘をつく。

嘘吐きの恋（後書き）

４話完結です。

愚か者の恋

僕は勘違いをしていた。

いつからかわからない。
でも、一つだけ確かなことがあった、それを気が付くには遅かったということ。
神様、愚かな僕をどうか許して下さい。

僕の幼馴染みはとてもよく似ている双子だ。
けれど、姿は似ていても性格はまったく違う。
大人しいほうが姉で活発なほうが妹というように真逆な性格をしている。
僕たちは小さいころから一緒に過ごしてきた。
だけど、ある時を境に一緒というのがなくなる。

僕が恋をしてからだ。

彼女の側にいつでもいたかった。
僕は彼女だけを見つめ、彼女のことだけを考えていた。
だけど、彼女はいつもはぐらかす。
僕の気持ちを知ってるはずなのにいつもはぐらかすのだ。
そんな日常に鬱憤がたまっていたのか、気が付いたら最低な行為をしていた。

僕は身代わりにしてしまったのだ。

顔が全く同じ君を。
しかし、聡明な君はすぐに僕の気持ちに気付いた。
それなのに笑って許してくれた。

僕は最低なのに。

いつも僕が君を見つめると君は寂しそうにうつ向く。
僕はそんな君に気が付かないふりをした。

もし、あの時に時間が戻せるなら。
もし、自分の気持ちに早く気が付いていたら。
君は僕の隣で微笑んでいたかもしれない。

けど、それはあくまでも『もし』なのだ。

気が付いたときは全てが遅かった。
僕が自分の気持ちに気付いたとき、君は眠っていた。
いつ目覚めるのかも解らない眠り。
体のあっちこっちに繋がれたチューブ。
外傷はないのに目覚めない君。
医師も首を傾げている。

けれど、僕は知っている、君が目覚めない理由を。
君は優しい人だから。

雨の日だった…。
いつもの通りで君を見かけて声をかけた。
立ち止まった君はこっちを向いて泣いていた、僕の時間がとまった…。

僕は初めて間違えた。

彼女と君を。

産まれて初めて君を彼女の名で呼んだ。

翌日から君は目覚めない。

僕は気が付いた、君の気持ちに。

そして、自分の気持ちに。

君の側に居たいって気が付いたんだ。

お願いだ、起きておくれ。

僕に本当の笑顔をみせてくれ。

僕は愚かだ。

大切なことにも気が付かないで勘違いをしていた。

最初から彼女が正しかったのだ。

僕は懺悔する、ベットで眠る君に。

僕は今日も懺悔する。

傍観者の見解

私は幼いころから周りをよく見ている子だった。

なにも知らないふりをしていたが全てを理解していた。
簡単に言えばまったくもって子供らしからぬ子供だったのだ。

私は知っていた。

けれど、私は傍観をするだけであり行動はしない。
だから、周りのことがよく解るのだ。

私は双子だ。
見分けがつくのは両親と幼馴染みだけ。
いつも三人で過ごしていた。
なにをするにも必ず三人。
これが私たちの中で暗黙の了解だった。

しかし、ある時を境に崩された。

思春期特有の恋心だ。
彼が私に恋をした。
全く同じ顔の姉ではなく私にだ。
だが、私は気が付いた。
彼は私ではなく姉に恋していると。
彼はまるで義務のように私に目を向ける。

私は疑問に思っていたのだ。
彼は私が好きだと言いつつなぜ姉の側にいるのだろう、
なぜ、私との時間ではなく姉との時間を優先にしているのだろうと。
そこまで考えて私は彼の勘違いに気が付いた。
私は笑った。
愉快だった。
愚かにも彼は自分の気持ちを見落としているのだ。
だが、愉快なのは最初だけだった。
彼は幾度となく言っているのに勘違いを正そうとはしない。
認めないのだ。
私は段々と苛立ってきた。
そして、最後には呆れた。
私は久々にゆっくりと辺りを見渡した。
そして、驚いた。
姉が彼を見つめていたのだ。
誰にも気が付かれないようにひっそりと。
いつから、いつから姉は彼を見ていたのだろう。
私が気が付いたとき、その瞳には涙が見え隠れしていた。
姉も気が付かない。
彼の勘違いに。
私は彼を罵りたい気持ちを抑えた。
彼自身が気が付かなければ意味がない。

私は後悔をした。

あの時、無理矢理でも気が付かせなければならなかったと。

姉が目覚めない。
衝撃的だった。
私の片割れが半身が目を醒まさないのだ。
私はなにが姉を追い詰めたのか考える。
そして、行き着いだ。

唯一、姉を追い詰めることが出来る存在に。

私は問い詰めた。
真実が知りたかったのだ。

話を聞き、私は愕然とした。
こんなにも愚かだったとは。
彼は最低なことをした。

彼は懺悔する。

心を閉じてしまった姉に。
君を愛している、目を覚ましてくれと。

私には何もすることは出来ない。
いや、してはいけないのかもしれない。
私は傍観することしかできないのだから。
彼と姉の幸せを願うことしか出来ない。

なぜなら、私は、世界を拒絶しているのだから。

私は今日も傍観する。

囁く者の言葉

ある晴れた日、一人の患者が運び込まれた。

理由は、目をさまさないから。
先生がおっしゃるには、精神的に追い込まれ夢の世界に閉じこもってしまっているらしい。

その患者には、毎日お見舞いの人が来る。
中でも同じ顔の人や憔悴しきった人がダントツだ。

なんで目をさまさないんだろう。
どうして起きないだろう。
待っている人がいるのに。

そう、彼女には待っている人がいる。
彼女は起きなけろばならない。
私はゆっくりと彼女に囁く。

『帰りなさい。』と。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

ある晴れた日ある病院のある患者が目を覚ました。

彼女が目を覚ますと待っていたのは妹と幼なじみの滅多に見ることのない顔だった。

囁く者の言葉（後書き）

これで終了です。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3516t/

三人の告白

2011年5月27日14時16分発行